

世界文化遺産推薦もはずみ 萩往還の観光街道化の推進

萩市長 野村興兒



はじめに

さる7月28日に萩市東部地域で発生した集中豪雨は、1時間雨量が観測史上最多の138.5mmを記録するという、これまでに経験したことのない記録的な豪雨であった。この豪雨により、家屋の全半



萩反射炉

壊、床上・床下浸水は1千棟を超え、道路、河川の損壊による幹線道路等交通網の寸断、通信手段の途絶など甚大な被害を受けた。この災害発生直後から、多くの自治体等よりお見舞い、支援物資など心温まるご支援をお寄せいただいたことに心から感謝の意を申し上げたい。

今回の集中豪雨は実に多くの貴重な教訓と課題を与えてくれた。災害に脆弱な道路交通網や停電等により情報伝達手段が十分に機能しなかったことは、災害状況の把握及び分散する小集落での救援活動に大きな支障を来たこととなった。今後、防災体制の在り方についてあらゆる角度から見直しを行い、災害に強い、市民が安心して生活できるまちづくりに向

けて取り組む決意である。

また、9月17日には、萩反射炉など8県11市の28資産で構成する「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」が、今年度のユネスコへの世界文化遺産推薦案件として決定された。

このことは、萩市がこれまで関連団体等と連携・協力しながら取り組んできたことによる大きな成果であるとともに、世界文化遺産登録を目指す本市にとって大きな前進であり、平成27年の確実な登録に向けて引き続き取り組んでいきたい。

「萩往還」の整備と活用

慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元は防長2カ国に移封され、慶長9年(1604年)、



萩往還ウォーク

の保全継承を基本とし、にぎわいのある道を「萩往還」の将来像として、街道観光をテーマにした新たな観光魅力の創出に向けて取り組んでいきたい。

使えるまち」となっている。これからは全国の範となるように、都市遺産を保存・活用する「萩まちじゅう博物館」という先駆的な取り組み等を大胆かつ確実に展開していきたい。

「萩往還」は、慶長9年の萩城築城後、城下町萩(萩市)と瀬戸内の港・三田尻(防府市)をほぼ直線で結ぶ街道として拓かれた全長約53kmの道である。

この道は、萩藩主が参勤交代に用いる「お成り道」として整備されたが、山陰と山陽を結ぶ陰陽連絡道として、人々の行き交う重要な交通路となった。幕末には、維新の志士たちが往来し、歴史の上でも重要な役割を果たした。



一升谷の石畳

しかし、幕末以降、藩庁が山口に移されると往来は少なくなり、特に大正・昭和になると自動車道が別ルートに整備されたため、約300年の間、基幹路線としての役割を担った「萩往還」は輝かしい歴史を秘めたまま、いつしか雑草に覆われ山路同然となって人々の記憶から忘れ去られていった。しかし、往時のままの石畳や一里塚などの遺構、連なる杉や松の木立等が姿を留めていることから歴史街道として再評価され、昭和56年度から昭和63年度にかけて、生活道路以外の古道と関連遺跡を中心に往還を保存するための整備が進められ、平成元年には「国指定史跡」に指定された。「歴史の道百選」「美しい日本の歩きたくなるみち」「夢街道ルネサンス」「日本風景街道」などに選定され、全国的にも歴史的な価値を高く評価されているところである。

また、ここ数年のウォーキング人気と相まって、「萩往還」には、風景を賞めつつ歴史ウォークを楽しむため、年間約2万人の人々が訪れている。これからも、長い歴史の蓄積によって形成された「萩往還」の歴史的環境、美しい景観

一口メモ

萩往還
総延長52・7kmで山陰と山陽を結ぶ
日本を近代化へ導いた維新の道「萩往還」

萩往還は、慶長9年(1604年)毛利氏による萩城築城後、その城下と三田尻(防府)を最短距離で結ぶ参勤交代道として拓かれた陰陽連絡道で、延長は52・7kmの街道。近世の庶民や維新の志士たちの通行路としても重要な役割を果たした。

元々は、室町時代に山口を中心として放射状に造られていた道を、江戸時代になって整備したものとされている。当時のまま残る宿場町、石畳、峠道など自然景観と調和した町並みや街道の風情にふれることができる。



企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」